

主語繰り上げ構文から見た素性共有の妥当性

中島優

(上智大学大学院)

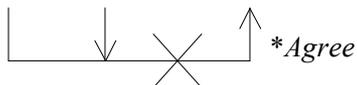
要旨:

一般的に一致とは、主要部に位置する値のない素性(probe)が、その c-command 領域内の同一の値のある素性(goal)と一致し、前者が後者から値を付与されることを指す(Chomsky 2000, 2001). 本発表で議論する素性共有では、一致が適応された2つの同一の素性は1つの共有された素性となり、どちらか一方の素性が値を持っている場合、共有された1つの素性も値を持つと定義されている(Frampton and Gutmann 2000).

日本語の主語繰り上げ構文は、Hiraiwa(2001)が指摘しているように、Chomsky(2000)の不活発性要素介入の制約(Defective Intervention Constraint)に違反する。(1)において、Tはまず構造的に近い「ジョン」と一致をするため、「ジョン」は不活性目標(inactive goal)となり、続くTと「メアリー」の間的一致を阻むことになる。日本語において、不定詞節内部では構造格が付与されないため(Takezawa 1987), (2)では「メアリー」に主格は付与されない。したがって(1)において、「メアリー」の持つ主格は主節のTにより付与されることになるが、(3)で示したように、Tと「メアリー」の一致は不活発性要素介入の制約の違反である。この問題を解決するために、Hiraiwa (2001)は多重一致(Multiple Agree)を提案している。

本発表では、まず素性共有の特性を見た上で、多重一致の問題点を指摘する。そして本来、不活発性要素介入の制約を違反するはずの日本語の主語繰り上げ構文が、一致を素性共有の操作とする立場のもとでは問題なく扱えることを示す。

- (1) ジョンが[INF まだメアリーが子供にあまく]感じた。 (Hiraiwa 2001)
- (2) ジョンが[INF メアリーを/*が子供に]思った。 (Hiraiwa 2001)
- (3) T > ジョン > メアリー (“>”は c-command の関係)



文献:

Chomsky, Noam. (2000). Minimalist inquiries: The Framework. In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, Mass.: MIT Press. Chomsky, Noam. (2001). Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge, Mass.: MIT Press. Frampton, John, and Sam Gutmann. (2000). Agreement is feature sharing. Ms. Northeastern University. Boston. Hiraiwa, Ken. (2001). Multiple agree and the defect intervention constraint. In *The proceedings of the HUMIT2000*, ed. Ora Matushansky and Elena Gurzoni, MIT Working Papers in Linguistics 40, 67–80. Cambridge, MA: MITWPL. Takezawa, Koichi. (1987). *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.